

はじめに

本書は『現代詩一〇〇周年』と題した、現在日本で活動している詩人による日本語の詩を収録した、アンソロジー詩集です。本書を企画したTOLTAは、ヴァーバル・アート・ユニットと称し、言葉を焦点にして様々な表現に関わる活動をしています。私たちTOLTAは、今年二〇一五年を、現在書かれているような日本の無定形・口語の自由詩の成り立ちから百年目であると宣言します。

百年前の一九一五年、日本の「詩」にとって、ふたつの画期的な出来事がありました。それは詩人・山村暮鳥の詩集『聖三稜玻璃』が刊行されたこと、もうひとつは、そのころ萩原朔太郎、室生犀星、山村暮鳥の三人が、「人魚詩社」というグループをつくり、活発に同人活動を行っていたことです。

現在もおおきな影響を与えている詩人、萩原朔太郎の最初の詩集『月に吠える』が刊行されたのは一九一七年です。『月に吠える』はすぐに大反響を呼び、萩原朔太郎は詩壇の一大スターとなりました。一方、その二年前に刊行された山村暮鳥の『聖三稜玻璃』は、当時の詩壇の多くの人から、無理解と拒否をもって迎えられました。にもかかわらず、私たちはこの詩集を、日本の「現在」の無定形・自由詩につながる最初の一步であり、同時に完成形であると考えます。

山村暮鳥の詩集『聖三稜玻璃』は（テキストだけならインターネットの「青空文庫」で無償で読むことができます）たいへん奇妙な作品です。この詩集に収録された詩は、百年前に出版されたということがおおよそ

考えにくいほど、現代的な特徴を維持しています。『聖三稜玻璃』という詩集は、当時も現在も難解だと言われてきました。なぜならこの詩集に収録された詩には、読者が詩を読解する前提となる手がかりが与えられていないからです。当時の読者はこの詩集の作品に接して、あっけにとられました——現在の日本で「詩」を読んだことのない人が「詩」を目撃した時にあっけにとられるように。

『聖三稜玻璃』の詩は、読者に対し、友好的にその「意味」を投げかけたり、説明したりしません。読み手は詩を読みながら、能動的に何らかの意味を自分のなかでつくりあげなければなりません。当時『聖三稜玻璃』の詩に対し、読み手として明確に「意味」を構成してみせたのは、たとえば萩原朔太郎でした。彼が「人魚詩社」で暮鳥と活動をともにしていたのは、もちろん偶然ではないでしょう。

そして、暮鳥がこの詩集で行った様々な試み——技法のみならず、詩において思想を表現するところみの上でも——を、現代詩は多かれ少なかれ、洗練

したり揺り戻したりしながら、くりかえしてきました。

「現代詩」というジャンル全体の特徴は、「特定のスタイルのスタンダードをつくらない」ということです。現代詩は、通常ひとが言葉を発するとき背後に置いている共通の理解への手がかりを、さまざまな手段を用いてずらしたり、ばらばらにしたり、二重にすることで、言葉の通常の読み解きから遠い場所へ読み手をみちびき、ふだんひとが使っている意味の「言葉」の世界を越えた「なにか」に注意を与えます。詩人は言葉に対し、詩でしか持ちえない意味を与える作業をしていると言えるかもしれません。そのための方法を詩人はさまざまレベルで模索し、作業を更新しつづけます。

この模索は詩人ひとりひとりにとってつねに新しい冒険であるはずです。ですがときに、自分のまへの他の誰かが模索した痕跡を発見することもある。そのとき詩人の冒険がいきつく先は何でしょうか。

山村暮鳥の『聖三稜玻璃』に接したとき、私たち

がまず持った疑問は「なぜ当時の彼にこのような詩が書けたのか」というものでした。そして同時に考えざるをえなかったのは「私たちはなぜ百年前に誰かがやってしまったことをくりかえしているのか」ということでした。

これに対する応答のひとつはもちろん、先にも上げた事柄に他なりません。無定形の現代詩は、それぞれの詩人が自分だけの定型、自分だけのリズムをつくり、言葉を組み合わせ、詩の意味を見出すことをそのつどそのつど行います。そしてこれこそが、そもそも詩が「現代」を名のるゆえんだと言えるかもしれません。ここには本質的に歴史はありません。暮鳥から百年たとうが二百年たとうが、私たちはそのつど自分で詩を見出していかなければなりません。私たちはくりかえしていかなければなりません。詩を書き続けなければなりません。

以上のように考えていくと、じつは、『現代詩一〇〇周年』というこのアンソロジーは、アイロニカルなタイトルを採用しています。本来、このような歴史的な意味のある時間、蓄積し継続する時間を否定する「いま、ここ」に「現代性」はあるはずだからです。しかし、私たちはこれを承知の上で、あえてこの本をこう名づけることにしました。私たちがこの本をつくるのは、『聖三稜玻璃』を百年前の山村暮鳥から受け取ったように、次の百年の後の誰かに、二〇一五年の私たちの詩を届けるためです。

二〇一五年一〇月

T O L T A 河野聡子